



放浪の歌人 石川啄木

フリーライター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。

20世紀の日本を代表する作家石川啄木の感性豊かな歌や詩は、今なお人々の心をとらえて離しません。啄木が「放浪の歌人」といわれるのは、北海道内を転居し、そこで数々の歌を詠んだからです。

岩手県で尋常高等小学校の代用教員をしていた啄木は、新生活を始めるため1907年5月、津軽海峡を渡ります。21歳。すでに妻子のある身でした。

函館では商業会議所臨時雇い、弥生尋常小学校代用教員の後、函館日日新聞の記者として活躍しますが、8月の大火で新聞社は焼失。函館の暮らしに見切りをつけ9月には札幌に引っ越し、北門新報に勤務するものの、2週間後には小樽に移り、小樽日報の記者となります。

しかし、ここも長くは続かず1908年1月、釧路の釧路新聞に赴任しますが、結局は創作に専念するため上京を決意し同年4月、釧路を去ります。この1年足らずの間に、啄木は4都市で暮らしました。

1910年に刊行した歌集「一握の砂」には、道内での生活を素材にした歌がたくさん収められています。それをもとに各地で啄木をしのぶ歌碑や銅像が建てられました。

銅像建設を最初に熱望し、提唱したのは札幌出身の彫刻家本郷新です。1955年3月に出た「文芸臨時増刊

号 石川啄木読本」(河出書房)で、49歳の本郷は「若い時に、目にしみておぼえた歌が、今では、胸をさし、からだをゆすぶる。若い頃は、涙を出さなかったが、今は涙を誘う」と啄木への熱い思いを打ち明けています。

そして「私の中で、啄木の像は、もう十年以上も温まっているのだが、まだ着手できないでいる。今年着手できるかもまだきまっていない。しかし、どうしても啄木の像を作り上げたいという気持が、だんだん強くなってきている」と書いています。

ちょうどそのころ、啄木の知人らが東京・浅草の等光寺に啄木生誕70年記念碑を建てる計画を練っていました。関係者のだれかがこの文章を読んで適任だと考えたのか、それとも記念碑建設計画の新聞記事を読んだ本郷が自ら売り込んだのか。いずれにしても、記念碑のレリーフ制作は本郷が手掛けたのです。同年10月に完成した碑には、若き啄木の上半身の姿が刻まれました。

函館 もの思う座像

でも、本郷はこれに満足していませんでした。3年後の1958年2月、函館の百貨店、棒二森屋常務の本山正名は仲間と東京の本郷宅で酒を飲んでいた際、本郷

から「僕は前から啄木の像を函館の砂山に造りたいと思っていたんだ。無償で造るよ。造ったら函館でもらってくれるだろうか。頼むから世話しておくれよ」と言われました。

酒席での放言ではないかと疑った本山は翌朝、本郷に真意を問いました。すると「100万円つくってもらいたいな。銅像の地金代と台座の石代だけ工面してください」と制作費にまで言及したのです。

本山はさっそく函館で各方面に声をかけ、石川啄木記念像建設期成会を設立、会長には実業家の渡辺熊四郎が就きました。同年9月の銅像建設趣意書には「製作費については、作者みずからの申し出によって、100万円程度の実費にとどまりますので、建設総経費も僅か150万円を超えない小額ですむのであります」と書いてあります。

それには訳があって、函館市内では同年7月、高田屋嘉兵衛像が建立されたばかりでした。総工費は571万円余り。これよりはるかに安いことを強調したかったのです。

一方、本郷が制作にあたり悩んだのは、立像にするか、座像にするかでした。「蟹とたわむれる姿も面白いかなと一度は思った。だが、私の到達したのは『考える人間啄木』へ落ついた。『もの思う人啄木』を作ろうとしたのであった」と随筆で回顧しています。



石に腰を下ろす函館の像

「しおれてもの思うのではなく、何かに抗しつづものを思うというような感じがほしかった」。その結果、低い石に腰を下ろす座像となったのです。また啄木が函館に渡った際、自らの詩集を持参したことから、左手に本を持たせ、文学者であることを演出しました。

銅像を設置した大森浜はかつてハマナスが咲き乱れる美しい砂丘でした。そこを啄木がよく歩いたことから、台座の銅板には「潮かをる北の浜辺の 砂山のかの浜薔薇よ 今年も咲けるや」という歌をはめ込みました。これも本郷のアイデアです。

除幕式が行われた同年10月18日、本郷には函館市長の吉谷一次から感謝状、建設期成会会長の渡辺からは記念品が贈られました。

釧路 腕を組む立像

啄木に執着する本郷にとって、次なる目標は立像の制作でした。相談を持ち掛けたのは、親交のあった元釧路市公民館長でアイヌ文化研究家の丹葉節郎です。

「私は生涯の悲願として啄木に関する彫刻を三つなし遂げたいと思っている。既に、東京浅草・等光寺のレリーフと函館・大森浜の啄木像は実現した。残り一つは釧路の幸町公園に、釧路駅に降りた啄木の像を建てたい」と訴えたのです。

丹葉が詩人石川啄木記念像建立期成会会長となり、1972年4月から募金活動がスタート。趣意書で本郷は「世の底辺に足を踏まえ、天空を仰ぐ啄木、そんなものが力強くこの街角に建つことを夢見るのである」と述べています。

でも、啄木に対する市民の関心は低く、寄付は一向に集まりませんでした。憔悴した丹葉は釧路新聞社長片山陸三に「啄木像の募金がかばかしくない。像は間もなく完成する。もし金が集まらなかったら私は腹を切って責任をとるつもりです。あとに生命保険が残るから、それを充当してもらおう」と語りました。

驚いた片山は常務に相談、常務が茶舗を営む杉本民蔵に頼み込んだ結果、300万円の高額寄付を受けるこ

とができました。高額寄付の報道に刺激を受け、募金は急速に集まり、本郷が制作費を請求しなかったこともあり、完成に必要な600万円を調達することができたのです。

同年10月14日、幸町公園で行われた除幕式で、丹葉は本郷や杉本ら協力者に感謝の意を表しました。幕の下から現れた啄木は、本郷が何年も前から思い描いていた通り、マントを羽織り、腕組みをして立っていました。

その前で、本郷は「この像が多くの人に何かを働きかけることができれば、つくった意義もありましょう」とあいさつしました。

幸町公園は旧釧路駅があった場所。啄木が駅に降りた印象を詠んだ「さいはての駅に下り立ち 雪あかりさびしき町にあゆみ入りにき」の歌碑も銅像と一緒に設置されました。

ところが、1993年、像を釧路川河口左岸に移す計画が持ち上がります。市は旧釧路新聞社の社屋をここに復元し、その脇に啄木像を置こうとしたのです。当初、歌碑は幸町公園に残す予定でしたが、像と歌碑は一体だという本郷の遺族の意向を踏まえ同年5月、歌碑も一緒に移設しました。



腕を組んで立つ釧路の像

札幌 握らなかったトウキビ

一方、札幌・大通公園の啄木像を制作したのは札幌在住の彫刻家坂坦道です。坂は制作の途中で「トウキビ論争、が巻き起ころうとは当初、考えもしなかったでしょう。

論争の原因になったのは、啄木の歌「しんとして幅広き街の 秋の夜の 玉蜀黍^{とうもろこし}の焼くるにほひよ」です。

啄木の銅像は函館と釧路の場合、作者の本郷新が謝礼を求めない代わりに、ポーズを自分の意志で自由に決めました。このため、台座にはめ込んだ歌に影響されることはなかったのです。

でも、札幌の場合はまず歌ありきでした。坂は建立記念誌「啄木と札幌」（石川啄木記念像設立期成会）で、制作依頼は「『啄木が札幌に来た時散歩中にトウキビを食べて居る像を作れ』と云う電話であった」と書いています。

「トウキビを食べて居る姿等はとても彫刻の形にはならない。せいぜい手に持って居る位にでもしなければならぬ」と考え、右手で軽く握ることにしました。

1981年4月、札幌観光協会と文学関係者が中心となり、トウモロコシを手にする啄木像を大通公園に建てる準備を進めていると新聞で報じられると、市民から「奇抜すぎる」「啄木を売り上げ増に一役買わせる印象が強い」という声が上がりました。

この時、期成会はまだ発足していませんでしたが、像の原型はすでに出来上がっていました。期成会発起



牧柵に腰かける札幌の像

人らが話し合った結果、誤解を招かないため、トウモロコシをはずすことにしたのです。当時、大通公園のトウモロコシ販売は観光協会の直営事業でした。

期成会事務局長で文学史研究家の木原直彦は記念誌の中で「秋という季節にやって来た啄木がトーキビを喰ったとみるのは極めて常識というものであろう」と指摘。

その上で「札幌の生活人ではなくて一種の傍観者のともいうべき漂泊者啄木であったから、トーキビを喰う`実行者、でないほうが妥当な線にちがいない。持たせて`商業主義、などと誤解されては不得策というものだ」と説明しています。

新聞にトウキビ論争の記事が出た後、坂は「他の人に会う度に『啄木のトーキビはどうなったか』と聞かれるのに閉口した」そうです。

「作者としてはトーキビは持って居ても形の上から見ても調和をこわす様な事なく気にするほどの事は無いと思う」と述べ、「一度作った形のせいか以前の方が良かった様に思えてならない」と本音を吐露しています。

完成した像は牧柵に腰かけ、右手は軽く握っていますが、何も持っていません。当初、歌は台座にはめ込む予定でしたが、観光客が啄木と肩を並べて記念撮影ができるよう台座を低くしたため、像の横に歌碑を独立させました。

大通西3丁目で除幕式が行われたのは同年9月14日。同年は啄木の70回忌で、この日は啄木が函館から札幌に足を踏み入れた記念の日でした。出席者による献花は、花の代わりにトウモロコシが使われました。

旭川 列車で旅する姿

啄木像は旭川にもあります。啄木は小樽から釧路へ向かう途中の1908年1月20日、旭川で1泊しました。その時の印象を詠んだ歌が4首残っています。

このことを旭川市民はあまり知りませんでした。歌碑を建設し街づくりに生かすべきだと提案したのは、



列車内に座る旭川の像

旭川出身の国際啄木学会元会長近藤典彦です。

首都圏在住の旭川出身者で組織する東京旭川会の会員が趣旨に賛同し、旭川の市民有志に働きかけた結果2011年7月、「旭川に石川啄木の歌碑を建てる会」が発足します。

講演会やパネル展など啄木への関心を高める活動を行う一方、市民や全国各地の旭川出身者に募金を呼びかけ、目標額の800万円を上回る933万円を集めました。

当初は歌碑の予定でしたが、最終的には啄木像を中心に据え、それに歌碑を添える構想に発展しました。デザインしたのは旭川出身の造形作家中村園。アルミ鑄造の作品は、啄木が汽車の中に座り外の雪景色を眺める姿です。4首の中の一つ「水蒸気 列車の窓に花のごと凍てしを染むる あかつきの色」がモチーフになっています。

啄木没後100年の命日にあたる2012年4月13日、JR旭川駅の旭川観光物産情報センターで除幕式が行われました。

(敬称略、肩書は当時のもの)

<参考文献>

- ・ 本山正名「啄木の像除幕を前に」『海峡』第47号、海峡評論社、1958年
- ・ 本郷新「啄木によせて」『啄木全集第五巻』月報、筑摩書房、1967年
- ・ 釧路新聞社編「丹葉節郎 郷土文化に貫く情熱」、[丹葉節郎]刊行委員会、1983年